

---

# 夢の中

はりがねん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夢の中

### 【ZPDF】

201082

### 【作者名】

はりがねん

### 【あらすじ】

連載小説としていますが、思いつきのネタの集まりです。掘り下げる程でもないものや、なんとなく思いついたものを集めています。当然、なんの脈略もない内容です。一応物語形式ですが、それぞれ独立している上、夢の中なので何でもアリ。それでも良い方はどうぞ。

## 始まり

ゆっくりと目を開き、のつそりと身体を起こす。じばりばーつと壁を見つめ、携帯電話に手を伸ばして時間を確認した。

12 / 3 Sat AM 8:47

しばらく眺め、まだ早いなと思い直してそのままベッドに横たわった。冬用の厚い布団へと潜り込み、そのまま目を瞑つて何も考えずに寝転がる。

何も考えずに暗闇の中にはいる事は幸せだった。

何も考えなくても良いという事が、とても好きだ。特に何かを考える事が苦手な私にとっては幸せな事である。

私はそのまま夢の中へとまどろんだ。

「また来たの？」

暗闇の中に洒落た机と椅子が白く浮かび上がる。椅子に腰かけたその人は、手に持ったティーカップを机の上に置く。面倒臭そうに立ち上ると頭を搔いた。

「いや、別に来たらいけないって訳じゃないけど……よっぽど起きるのが嫌なんだね」

名前の知らないその人はワイシャツにジーパンという、かなりラフな恰好だ。私の普段の恰好と良く似ている。洒落つ気が無い所が特に。

「それで、今度は何が希望なのかな」

私は漠然と想像を膨らませる。彼には私の考えている事が何故か全てお見通しなのだ。別にその事に嫌悪を覚える事はなく、どこか

でそれが当然のようにはじめていた。

私の想像を受け取った彼は苦笑を浮かべる。

「ほんと、そういうの好きなんだねえ」

「いけないかな。

もつとも、仮にいけないと言わわれても私にやめるつもりはなかつた。

「知ってるよ。別に好きにすれば良いさ。ここには君の夢の中なんだからさ」

私の心中を覗ける人は誰もいない。私が夢の中でどんな世界を漂おうと、それに誰かが干渉など出来る筈もない。

「そうだね」

彼はぐるりと人が一人入れそうな円を描く。出来あがつた円の向こう側には暗闇ではなく、別の景色が見えていた。

「さあ、準備は出来たよ。それでは 良い夢を」

「大当たり～！」

店員が大きな声を張り上げると共に、その手に持つベルをけたましく鳴り響かせる。周囲にいた買い物客たちが何事か、とこちらの方に視線を向けた。

私はビンゴマシーンから手を離し、店員に冷めた視線を向ける。小さな穴から吐き出された玉は黄色だった。それが何等を示しているのかはさっぱり見当もつかないが、このような状況になるのであれば、ハズレの方がいくらかマシだつただろう。

店員が私の様子に気づいた様子はなく、大きな声のまま喋り続ける。

「おめでとうござります！ 三等賞です」

たかが三等賞でこの盛り上がり。一等をとつていたら、と思つとぞつとする。

そんな事を考えていると、店員が後ろにある段ボールから何かを取り出した。

「三等賞の商品は魔獣です！」

「は？」

私は反射的に聞き返していた。

当然だろ。そんな物、欲しくもない。

「いりま……」

「あ、ちなみに返品は不可ですでの」

景品を辞退しようとすると、店員に先手を打たれた。

（へ……返品不可の当たりくじなんて、いらねえつ！）

思わず顔が引き攣るのを感じるが、店員がその事に気付いた様子はない。店員はそんな私の手に何かを押しつける。私は受け取りたくなかったが、半強制的に受け取られた。

手に持つた魔獣とやらを見てみると

「……柴犬？」

そこには見紛う事なく、柴犬がいた。

(これのどこが魔獸なんだ……)

柴犬を顔の目の前まで持ち上げて全身を舐めるように観察していると、店員の自慢気な声が聞こえてくる。

「驚くことなけれ！ その魔獸、見た目は柴犬で可憐な姿をしているが、それは世を忍ぶ仮の姿！」

柴犬如きでここまで格好つける奴もそりはいまい。語り口が異様なため鬱陶しさを感じるが、それは表情に出さず心の内に留めた。

「なんと、裏返すと……豹になるのです！」

小型犬である柴犬が、どうやつたら大型の肉食動物である豹になるのか。そもそも、イヌ科ですらなくなっている。せめて狼とかならば、まだ分かるのに。

いや、問題はそこではなかつた。

(裏返すつて……なに？)

胡乱な視線を店員に投げていると、店員は私から柴犬を奪い取り、口を思い切り開かせていく。通常は赤色であるはずの口内が、この柴犬は黄緑色をしている。その事が不気味だった。

店員はなんの躊躇いもなく、柴犬を文字通りひっくり返した。その様はリバーシブルのぬいぐるみのようだ。

(……これ、本当に生き物なのか)

どこにでもいる普通の柴犬が、あつという間に黄緑色をした豹へと変わってしまった。大きさも柴犬の時に比べると倍ほどになつている。

店員は一仕事終えた、とばかりに額の汗をぬぐう。

「いかがですか！ これが三等の景品である魔獸です！ かつこいいでしょ。すごいでしょ！」

黄緑色の豹は私の足元にやつて来ると、その足にすり寄つてきた。私は思わずその頭を撫でる。

「つきましてはこの魔獸、人とまったく同じ食品を食べるので、普通の豹と比べてエサ代は困りません」

豹に対する知識はないので、それが本当かどうかは怪しい所である。

「いかがです？かわいいでしょう。おまけに柴犬の姿にもなれるので、場所もとりません！」

「いや、いりません」

店員の笑顔が凍りつく。足元の豹も身体を私の足にすり寄せたまま硬直している。

「私の家、ペット禁止ですから」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0108z/>

---

夢の中

2011年12月1日19時47分発行